

「姑蘇繁華図」をめぐる旅

——研究会開催にいたる経緯——

佐々木 睦

SASAKI Makoto

(首都大学東京助教授・COE共同研究員)

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において、我々第一班は「図像資料の体系化と情報発信」を担い、図像資料を通して人間のいとなみを解読していく研究を行ってきた。その活動の軸は以下の三点である。

- 一、『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編纂発行（本文を英訳するとともに、図に付けられたキャプションの英語・中国語・韓国語・フランス語訳を作成）。
- 二、『日本近世・近代生活絵引』の編纂。
- 三、『東アジア生活絵引』の編纂。

このうち三の『東アジア生活絵引』の編纂こそが、今回の研究会の開催に繋がってゆく事業である。

我々が活動を開始したのは2003年からだが、「姑蘇繁華図」を東アジア編の中心に据え、本格的に研究を開始したのはその翌年のことである。まず美術史を専門とする金貞我が「徐揚筆『姑蘇繁華図』について」という研究発表を行った（2004年6月25日）。ここでは、「姑蘇繁華図」の成立の背景、表現様式の特徴、作者徐揚についてなどの基本的な事柄に加え、他の同時代の資料と比較しつつ「姑蘇繁華図」の絵引き資料としての意味を探る試みが行われた。その後も、「姑蘇繁華図」を場面ごとに分け、そこに描かれた人物の衣服、器物、商品や行為などについて解読する作業を続けてきた。その試みは現在も継続中である。

しかしこの活動は順調なものではなく、実は我々はスタート地点から大きな壁にぶち当たっていた。

上述の三つの事業はいずれも巨著『絵巻物による日本常民生活絵引』(全5巻)を継承するプランとなっている。ならば、東アジア編の編纂においても、多くの「絵巻物」を題材に、そこから作者の「観察」を通して、人々のいとなみを読み解いていくという作業が基本となるであろう。しかしまず第一に中国には日本のように民衆の生活を描いた「絵巻物」が豊富には存在しない。さらに、中国絵画の本質とも言うべきことであるが、絵画というものが、「観察」という作業に基づいて行われているわけではないのである。つまり「かくある」ではなく、「かくあるべし」という理念に基づいて描かれるのだ。もう一つは文学にも通じることだが、個々の作家のオリジナリティが必ずしも重視されず、過去のすぐれた作品の踏襲やその引用を尊ぶことである。ならば「観察」とそこから引き出される「事実」というものに絶対的信頼を置くことには大いに疑問を抱かざるを得なくなる。たとえば「姑蘇繁華図」は中国の民衆の生活を描いた「絵巻物」(「画卷」)として数少ない作品の一つであるが、この絵

はつとに指摘されているように、乾隆皇帝の御代を讃え、その恩恵を受けた蘇州の繁栄ぶりというのが一つのテーマになっている。この絵の元の名を「盛世滋生図」という所以である。ただそのために幾分の不自然さを伴うのも当然であって、「画家の意図がこうしたところにある以上、都合の悪い物、たとえば泥棒だとか、ゴミためだとか、乞食だとかといったものは描かれていない」という現実の暗い部分を隠しているという指摘もなされている（大木康『明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化』（講談社選書メチエ、1995年、講談社、24頁））。それどころか、この絵の主要な部分であり、一見すると生き生きとした当時の生活を伝えるかに思われる名所のにぎわいや、人々のいとなみすら、実はパターン化された描写、伝承化された風俗表現に通じるという指摘もある。

*この「姑蘇繁華図」における類型化表現については、金貞我が論文として発表している（金貞我「風俗表現における図様の伝統と創造—東アジア風俗画資料の作例から—」（『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、2006年、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議））。

ならば「姑蘇繁華図」に描かれた風景は現実を反映していないのだろうか？ そこに描かれた人々のいとなみ、風俗は事実から乖離した類型化表現にすぎないのだろうか？ そして「姑蘇繁華図」を元に「絵引き」を作ることにはどんな意味があるのだろうか？ あるいは「姑蘇繁華図」の新しい「読み」の可能性はないのだろうか？

我々はこのような疑念を抱きつつも「姑蘇繁華図」と格闘してきたのである。

そしてこれらの活動と平行して本班では「姑蘇繁華図」の解明に向け、これまで通算三度にわたる実地調査を行っている。以下にその概要を記す。

第一回調査（2004年10月8日～10月12日） 蘇州

参加メンバー：福田アジオ、田上繁、金貞我、佐々木睦、彭偉文（COE研究員RA）

日時と主要調査地点

10月9日（土） 上海から用直^{ろくちよく}を経由して蘇州へ。

調査地：虎丘、斟酌橋、普濟橋、五人墓、山塘橋、山塘街

10月10日（日）

調査地：靈岩山、木瀆鎮（斜橋、西安橋、東安橋）

10月11日（月）

調査地：閶門、虹橋、胥門、万年橋、文廟、瑞光塔、盤門、太湖、石湖、行春橋

第一日目の調査では主に、「姑蘇繁華図」に描かれた風景を、現在の景観と照らし、風景描写がいかに現実を反映しているかを確認した（図1）。この結果確認できたのは、「姑蘇繁華図」に描かれた郊外の風景が、驚くほど忠実に現実の景観を描写しているということであった。携えていった「姑蘇繁華図」を開いてみると、300年の時を隔ててなお、その景観はピタリと符合した。特に石湖の西岸から行春橋を眺めた時の感動は忘れられない。「姑蘇繁華図」とは正反対の位置からの眺望であったにも関わらず、眼前には「姑蘇繁華図」の描く300年前の世界が広がるようであった。

またこの調査では興味深い現象にも気づいた。観光業の一環における街並みの整備と思われるが、あえて景観を「姑蘇繁華図」と一致させようとでもすべき工事が閘門とその手前に位置する虹橋で行われていた。数年後には往時のにぎわいが再現されているかも知れない。またこんなこともあった。虎丘のふもとにある斟酌橋の対岸に渡り、そこからこの橋と虎丘を臨むと、それはまさに「姑蘇繁華図」の巻尾に描かれた景観と一致するはずだ。ならばと対岸に渡ると、そこはレストランの建築中であった。鉄骨をよじ登って二階まで上がって撮影をしたが、さらに上に登ることができれば、より「姑蘇繁華図」と近い眺望を得ることができるであろう（図2、3）。「姑蘇繁華図」と同じ風景が見られることは、このレストランの「売り」になることは間違いなく、「姑蘇繁華図」と現代の観光業、サービス業が結びついている現象の一端に触れることもできた。

*この調査旅行については佐々木が一班の研究会において、「姑蘇繁華図をめぐる旅」と題してビデオ上映とともに報告した（2004年12月3日）。



図1 手作りの「姑蘇繁華図」画卷や地図を片手に、絵と景観を照らし合わせるメンバー（2004年10月10日、霊岩山にて）



図2 現在の斟酌橋（手前）と虎丘塔（雲岩寺塔 左奥）



図3 「姑蘇繁華図」巻尾の斟酌橋と虎丘塔

第二回調査（2005年1月20日～1月23日） 瀋陽

参加メンバー：鈴木陽一、佐々木睦

真冬の瀋陽を訪れた我々の主要訪問地は遼寧省博物館であり、「姑蘇繁華図」に関する研究交流と、最新技術によるデジタル化保存の提言を行うことにあった。事前の連絡で行き違いがあり、突然の訪問のような形になってしまったが、折しも展示中の「姑蘇繁華図」の現物とガラスケース越しにだが、対面することができたことは幸運であった。またこの時に遼寧省博物館副研究員の戴立強氏と知り合うことができ、戴氏を通じ、帰国後もお互いに資料の提供を行うなど、研究交流の礎を築くことができたことは評価すべきであろう。

第三回調査（2005年10月10日～10月16日） 蘇州、瀋陽

メンバー：福田アジオ、田島佳也、金貞我、王京（COE 研究員 RA）、彭偉文（COE 研究員 RA）

蘇州における二度目の調査と、やはり二度目となる瀋陽の遼寧省博物館訪問を行った。

日時と主要調査地点

蘇州（10月11日～10月13日）

10月11日（火） 朱家角を經由して蘇州へ

調査地点：閶門、探橋、吊橋、山塘橋

10月12日（水）

調査地点：山塘橋、山塘街、半塘橋、木渚鎮、義倉、運河、石湖、漁荘、行春橋、越城橋

一回目の蘇州調査のキーワードが「風景」であるとするれば、二度目の調査は「民俗」を中心とするものであった。中国俗文学学会常務理事で民俗学研究者の馬漢民氏が精力的にレクチャーならびに案内をしてくれた。この調査と馬氏の御教示により、「姑蘇繁華図」に描かれた人々の生活が、相当程度に蘇州の当時の実態を反映していることが確認できたのである。

瀋陽（10月13日～10月16日）

主要な目的は、遼寧省博物館を訪問し、収蔵庫にある「姑蘇繁華図」の現物を熟覧すること、ならびに従来我々が所有している以上に精緻な「姑蘇繁華図」を含む大部の資料を入手し、日本に持ち帰ることにあった。前回訪問時に知り合った戴立強氏が便宜をはかってくださり、戴氏の紹介で美術史権威の楊仁愷氏（遼寧省博物館名誉館長）と面会することができた。そしてメンバーを代表し、金貞我が「姑蘇繁華図」原本の熟覧・調査にあたった。

これら三度の実地調査を通じ、我々は「姑蘇繁華図」を中心資料としたことについて、それが間違った選択ではなかったことへの確信を強めていった。さらに幾度かの研究会を通じて議論を深めていく中、自ずと専門家を招聘して、我々が抱えている疑問を解明し、より深い理解を得ようという気運が高まった。そしてやはり『東アジア生活絵引』の対象である朝鮮半島の風俗画についても研究者を招き、東アジア全体の図像に関する研究会を開くことを決めた。かくして2005年12月における公開研究会の開催が決定した。「姑蘇繁華図」を所蔵する遼寧省博物館から戴立強氏、「姑蘇繁華図」に描かれた蘇州から馬漢民氏、そして韓国の国立民俗博物館から張長植氏の三氏が快く我々の招きに応じて来日して下さった。特に戴氏、馬氏は、我々が旅を通じて知り合った人物であり、「姑蘇繁華図」が引き寄せた縁を感じざるを得ない。研究会ではこの三名に加え、我々の班を代表して金貞我が発表し、公開の形で行った。個人的な感想であるが、研究会は大成功のうちに終わったと思う（図4、5）。

この研究会を通じて得た知識は多いが、「姑蘇繁華図」に関する疑問や疑問がすべて解決されたわけではない。我々の活動はすでに三年目に入ったが、「姑蘇繁華図」をめぐる旅はまだ始まったばかりなのである。



図4 研究会の様子



図5 公開研究会終了後、レセプションの会場にて
前列左より、張長植、金貞我、馬漢民、戴力強、鈴木陽一
後列は佐々木睦（敬称略）



図6 公開研究会ポスター

公開研究会プログラム

神奈川大学21世紀COEプログラム第1班公開研究会

図像から読み解く東アジアの生活文化

日時：2005年12月10日（土） 13：00～17：00

会場：神奈川大学横浜キャンパス16号館第2会議室

プログラム

あいさつ：福田アジオ（神奈川大学21世紀COEプログラム拠点リーダー）

①「清明上河図」と「姑蘇繁華図」

戴立強（中国・遼寧省博物館副研究員）

②蘇州の生活と民俗

馬漢民（中国俗文学学会常務理事・副秘書長、蘇州市民間文芸家協会名誉主席）

休憩

③朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相

張長植（韓国・国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官）

④都市図における風俗表現の機能

金貞我（神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員）

司会：鈴木陽一（神奈川大学大学院外国語学研究科教授）

通訳：中国語 彭偉文（神奈川大学21世紀COEプログラム研究員RA）

王 京（神奈川大学21世紀COEプログラム研究員RA）

韓国語 林淑姫（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

*発表は一人45分（通訳込み）。発表終了後質疑応答を行った。

*研究会終了後レセプションを行った（17：30～19：30）。